

# イギリス委任統治下パレスチナ人の旅行記に見る〈郷土〉

ビラード

田浪亜央江 (大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター)

キーワード：パレスチナ、シリア、郷土、委任統治、国境、移動、ホスピタリティ

## はじめに

歴史学者のニコラ・ズィヤーダ (1907-2006、2章で詳述) は1916年と1925年という二つの年のあいだに、二つの地域を移動することをめぐる自分の体験の変化について次のように記している。

「父の死後、1916年にダマスカスからナザレに戻ったとき、旅行に必要な書類は何もなかった。…しかし1925年にバイルートとラタキア、アレppo、そしてダマスカスを訪問するときには、イギリス委任統治下の国からフランス委任統治下の二つの国に入るため、パスポートを持っていなければならなかった」<sup>(1)</sup>。

オスマン帝国下では「パレスチナ」という行政区画はなく、ナザレを含むパレスチナ北部はバイルート州の一部だった。オスマン帝国の一部であるダマスカス州からバイルート州に行くのに、旅行許可証の類は不要である。しかし英仏は、第一次大戦でのオスマン帝国の降伏後ただちに帝国内のアラブ地域で軍政を開始し、1920年4月のサン・レモ会議で両国による委任統治の領域を決定する。イギリスはそれを受けて一方的にパレスチナの委任統治宣言を出した(1923年9月より、国際連盟承認下での統治)。フランスも当初のシリア(ここではレバノンを含んだ概念)をまず5分割して統治を開始しており、引用文中の「フランス委任統治下の二つの国」とは「シリア国」と「大レバノン国」を

指す。

上記は、ほぼ100年前に中東地域の諸国家体制が成立してゆくプロセスのなかのごく一部だが、このようなかたちで作られた中東地域の国境と主権は現在あちこちで破綻をきたし、実体を失いつつある。植民地主義的支配に都合よく、かつ現地社会にとっては不自然なかたちで生み出された国境線や主権がいずれ崩れることそれ自体は、歴史の必然の流れとも言える。しかしその再編のプロセスはこの地域の人々に多大な犠牲を強いながら激しく展開し、世界全体に不穏な影を投げかけている。

英仏委任統治領のなかでも、特異な事情を背負われたのがパレスチナだった。ここでは単に領域だけでなくその将来の主権のあり方も、現地住民の意思とは無関係に、最初から方向性が決められていた。将来ユダヤ人のナショナルホームをこの地に作るという委任統治規約がそれである。約30年間にわたる委任統治のなかで、その方針は現地社会に混乱と混迷をもたらし、ついにイギリスは解決策を国連に委ねる。現地のユダヤ人コミュニティは、その結果出された分割決議を形式的に受け入れる一方で、軍事作戦によって現地住民を追放した。戦争のなかで既成事実化されたイスラエルの領域は、国連決議で決まった領域を大きく超えるものだった。そこには含まれなかったガザ地区とヨルダン川西岸地区も、1967年の六月戦争(第三次中東戦争)以降、イスラエルの占領地となった。

両地区は現在イスラエルの入植地建設や「分離壁」によってバラバラに寸断されており、もはやパレスチナ独立国家の実現などまったく非現実的になっている。一方、パレスチナ人に

(1) Ziyādah, Niqōlā. Thalāth jawāzāt safar wa-arba' ijāzāt. (「3冊のパスポートと4回の休暇」)。http://www.nicolaziadeh.com/ より。註15も参照のこと。

とってのパレスチナの地理的イメージは、あくまでかつての委任統治領パレスチナ（歴史的パレスチナ）全域だ。それはイスラエル国家がその78パーセントの面積を占めて存在することやパレスチナ国家樹立の非現実性とは別次元の、郷土喪失の歴史経験やそこへの帰還の夢といったパレスチナ人が共有する思いを象徴するイメージだと考えられる。

皮肉な話ではあるが、パレスチナ人追放がイギリス委任統治領パレスチナで起きた以上、パレスチナ人たちがイメージとしてもつパレスチナは、100年前にイギリスがシオニストの主張を取り込みつつ、植民地支配者として（同じ立場であるフランスとの折衝のなかで）一方的に確定した領域的枠組をなぞることになる。しかし第一次大戦末期にこの地がイギリスの占領下に置かれ、次いで軍政が開始された当初、現地の人々はそのようにパレスチナがシャーム（歴史的シリア、パレスチナを含む概念）と切り離された領域として作られること自体に激しく抵抗した。そもそも1919年までのオスマン帝国の統治下では、パレスチナはヨルダン川東西の地域を指す呼称であり行政単位としては存在しなかった。この地の人々はバイルートやダマスカス、モースル、バグダードといった都市を中心とする広域間のネットワークをもち、人々が自由に移動しうる空間、コミュニケーションの範囲の広さは、同時に言語・宗教・文化の多様性を意味していた。人々の暮らし方にそぐわないかたちで設定された現在の諸国家体制の限界が露呈されるなか、このような空間や時間のあり方を思い出し、領域として捉えるのではない〈郷土〉との関係を想起すること抜きに、それへのオルタナティブを構想することは困難であろう。

こうした問題意識をふまえて本稿が扱うのは、パレスチナがシリア（およびヨルダン川東

岸）と切り離され、英国委任統治が開始された時期に、パレスチナ北部から現在のレバノン、シリアを旅した知識人・文化人による回想録である。国家的領域の存在しなかった時代の記憶は、この時点でもリアルに残されている。当時生まれたばかりの委任統治領パレスチナの境界を越えて移動することは、彼らにとってどのような意味をもっていたのだろうか。別の国家となりつつあったレバノン・シリアは彼らの目にどのようなものとして存在していたのか。ナショナリズム運動に直接コミットしたわけではなく、自分のいる場や交流する人々を政治的に定義づける意図も動機もたなかった人々の自由な目と耳を頼りに、テキストを読み進めたい。

なお、〈故郷〉や〈祖国〉を意味するアラビア語として「ワタン」の語が日本語の記述上でも最近使われるようになってきているが<sup>(2)</sup>、「ワタン」はナショナリズムを示す「ワタニーヤ」にも転化できる語である。本稿では使用するテキスト上の記述に従い「ビラード」を用いるが、これはより一般的な意味で〈郷土〉や〈くに〉を示す言葉と言える。

## 1. ワースィフ・ジャウハリヤーの旅 [1922]

ワースィフ・ジャウハリヤー(1897-1973)は、オスマン朝支配下のエルサレムに生まれ、1919年から1948年まで英国委任統治政府の現地雇用職員として登記局や国税庁に勤務した人物である。幼少期から音楽の才を見せ、アマチュアの音楽家としてウードなどの楽器を弾き歌や踊りをこなしたため、エルサレムの有力者や委任統治政府の高官と親交をもち、エルサレムを訪れた多数のアーティストと積極的に交流した。したがって彼の残した手記<sup>(3)</sup>は、オスマン朝末期から委任統治期エルサレム社会、とりわけ

(2) アラブ文学を研究する岡真理は2000年代以降、「ワタンとは何か」をテーマとする論考を多数発表している。また「ワタン」の語をタイトルに入れた学術書としては、錦田愛子『ディアスポラのパレスチナ人 故郷（ワタン）とナショナル・アイデンティティ』（有信高文社、2010年）がある。

(3) オスマン朝末期に関する第1巻とイギリス委任統治時代を扱った2巻に分かれているが、本稿で扱うのは第2巻になる。Jawhariya, Waṣīf. *Al-Quds al-intidābiyah fī al-mudhakkarat al-jawhariya: al-kitāb al-thānī min mudhakkarat al-mūsīqī Wāṣīf Jawhariya*. Institute for Palestine Studies. 2005.

その上流層の文化・社会生活についての貴重な記録となっている。

その彼が30日間の休暇を得て、パレスチナの外へと最初に旅をしたのは、1922年夏、25歳の時に兄のハリールとともにレバノンとシリアに向かった時のことだった。二人はまず車で北上しパレスチナ北部の港町ハイファに向かう。翌日はラアス・アル＝ナークーラから沿岸路を北上し、昼にはベイルートに到着する。5日あまりをベイルート散策に費やしたあと、アレ、プハムドゥーン、ソーファルといった近郊の小さな町のホテルを転々としつつ2週間を過ごし、さらにベカー高原の景勝地ザフレで3日間を過ごしてから最終目的地であるダマスカスに到着する。

兄の旅費も負担することにしたワースィフの手持ち資金は165エジプトリラ(GM)<sup>(4)</sup>だった。3年前に登記局で勤め始めたさいの彼の月給は5GMである。これはいかにも少なく、いずれ昇給はあったと考えるべきだが<sup>(5)</sup>、仮にそれを計算に入れなければ3年分の収入の大部分がこの旅費に充てられたことになる。30日間で2人分とはいえ、収入レベルに比してかなり贅沢な旅行である。最初の宿泊地となったハイファではすでに、近い将来の結婚を意識した調度品を購入し、9GMを支出している。またベイルートでは「ブルジュ広場を見下ろす新しいホテル」、ザフレでは「もっとも有名な」カドリホテル<sup>(6)</sup>、ダマスカスではヴィクトリア・ホテル<sup>(7)</sup>を宿泊先に選んでいる。節約志向はなく、165GMを使い切って旅を味わい尽くそうとする意気込みを持っていたと想像出来る。その結果として後述のように、エルサレムに戻

る手前で資金が尽きるというトラブルに見舞われる。

### 憧れの地としてのレバノン・シリア

旅の動機としてワースィフが挙げるのは、兄ハリールから聞かされた、レバノンやシリアの美しい光景である。ハリールは第一次大戦中、徴兵のためレバノンに駐屯していたが<sup>(8)</sup>、除隊して帰国後、折に触れてこの地の思い出を語っていたようだ。ハリールはまた、1918年に文化人の集う「ジャウハリヤ・カフェ」を旧市街近くのロシア地区にオープンしていた。ここではベイルートで見たとおりの「洗練された盛り付け様式」で前菜を提供し、評判を呼んでいたという。

ベイルートがとりわけこのように洗練された文化様式の地として憧憬の対象となる背景には、オスマン帝国内で最初にミッション活動を始めたフランスのシリア支配がある。1860年、オスマン帝国の支配に反発したマロン派の住民が、ドゥルーズ派の領主への抵抗のかたちで蜂起すると、ナポレオン軍はマロン派住民の保護を口実として派兵を行う。レバノンはクリスチャンの知事による「特別行政区」としてフランスの影響力のもとに置かれるようになり、1888年にベイルートはパレスチナ北部を含むベイルート州の首都となった。1895年、ベイルートとダマスカス、そして穀物生産地であるムゼイリブがのちにDHP(ダマスカス・ハマ鉄道)となるフランス企業により鉄道でつながられ、ベイルートの経済的的重要性はさらに高められる。

ワースィフと兄は、カフェでアラク酒を飲み、

(4) 委任統治政府がパレスチナの通貨を発行するのは、この5年後の1927年のことであり、当時はオスマン帝国のトルコリラに代わり、エジプトリラ(ポンド)が使われるようになっていた。

(5) この時期の物価についての参照値は少ないが、1919年に夜間学校のアラビア語教員の月給としてハリール・サカーキーニーが得ていたのは12GM、1920年に教員養成学校の教員の月給としてマアルーフ・ルサフィが得ていたのは25GMであった。Musallam, Akram. *Yawmiyāt khaliil al-sakākini, kitāb al-thāliith: 1919-1922*. Markiz khaliil al-sakākini al-thaqāfi. 2004. Khulusi, Safa. Ma'rif Ar-Rusafi in Jerusalem. *Jerusalem Quarterly* 22/23. 2005.

(6) 5つ星ホテルの「カドリ・グランドホテル」として現存。

(7) 19世紀末、シリア訪問が予定されていた英国のヴィクトリア女王の名をとり、この地域で「最初の近代的ホテル」として建設された。1955年に取り壊されている。http://www.souriat.com/ [2016年6月25日アクセス]

(8) 1908年にオスマン帝国のクリスチャンの兵役免除が取り消されたため、第一次大戦にはクリスチャンも徴兵された。なお、本稿では特にテーマとしないが、ジャウハリヤ兄弟は宗教的にはクリスチャン(ギリシャ正教)に属する。

同席した人々と交流を重ねる日々を過ごす。ここでジャウハリヤが特記するのはやはり、レバノンの洗練されたサービスである。「アラクを注文すれば、25種類のとりどりの前菜が見た目も鮮やかに提供され、値段もごく安いのだ」。彼は兄と4時間ほどもぶっ続けにアラクを飲むが、「アラクが上質なためだろう、まったく悪酔いはしなかった」<sup>(9)</sup>。他方、ダマスカスに入れば「感動で言葉を失った。このアラブの町は、建物やスークや住民の生活に至るまで、アラブ的なものを保っている」<sup>(10)</sup>。ベイルートの洗練された料理やサービス、ダマスカスのアラブ的な雰囲気。それは現在の目で見ればステロタイプ化され尽くされたイメージではあるが、それを目にし味わう喜びに満たされた当時の実感をワースィフは素直に表現する。

### 鉄道・国境

ダマスカスでも連日明け方まで飲んで過ごし、気がつくと所持金は底をつき、休暇の終わりまであと2日となっていた。あわてて二人はダマスカスで買い込んだ土産を手にし、帰国を急ぐ。「それで我々は荷造りをし、ダマスカス細工やブロンズ細工、双六台などでいっぱい箱を抱え、ムザイリブ・ダルア経由の鉄道に飛び乗った。とても暑い日で、あらゆる種類の惨めさを味わい、ベイルート菓子は暑さで溶け出した」。慌てふためいた様子が目に浮かぶようだが、ここでベイルートの「洗練」、ダマスカスの「アラブ的な雰囲気」をそれぞれ象徴している土産物が忘れずに言及されている。

彼らの無計画性はさておき、ダマスカスで資金が尽きたところで、早朝に出ればその日

のうちにハイファまで戻れる環境は存在していた。移動の面で見れば、それは1909年にオスマン帝国が完成させたヒジャーズ鉄道である<sup>(11)</sup>。1866年、帝国内の最初の鉄道が英国企業「イズミールーアイドゥン鉄道」によって開通されたのを皮切りに、オスマン帝国内には上述のDHPを含め、イギリス、ドイツ、フランスがそれぞれ鉄道を敷設し、帝国内外の権益と影響力の拡張競争を続けていた。他方でオスマン帝国憲法を停止し専制を開始したアブデュルハミト2世は、メッカへの巡礼鉄道を作ること帝国外のムスリムの関心と協力を引き寄せつつ<sup>(12)</sup>、多民族・多文化的な世俗的オスマン主義をイスラーム主義にとって代えることで、凋落しつつある帝国の危機を乗り越えようとした。

ダマスカスからメディナに向かう南北の本線の開通（1908年）に先立って、ダルアから西に向かいハイファに通じる支線は1905年に完成した。ダルア以南の鉄道建設のための資材調達をフランス系のDHPの路線に依存し続けるのではなく、地中海に面するハイファ港から独力で資材を調達するのが目的であった。もともと小さな漁村だったハイファが現在のような港湾都市となるきっかけを作ったのは、何よりもヒジャーズ鉄道だった<sup>(13)</sup>。

ヒジャーズ鉄道はダマスカス・ハイファ間の約260キロの距離を11時間半かけて運行した。決して速いとは言えないが、ヒジャーズ鉄道のダマスカス・ハイファ間の経路が現在のシリア共和国とイスラエル領内を直接結びつけていることを考えれば、こうした移動そのものが今日では不可能になっているのである<sup>(14)</sup>。ジャウ

(9) Jawhariya, p.356.

(10) Jawhariya, p.357.

(11) ヒジャーズ鉄道に関しては、以下を参照。Özyüksel, Murat. *The Hejaz Railway and the Ottoman Empire: Modernity, Industrialisation and Ottoman Decline*. I.B.Tauris. 2014.

(12) 結局、過酷な気候・地理条件や地元のベドウィンの妨害などが重なり、メッカまでの鉄道は実現せず、第二の聖地でメッカより約340km手前のメディナまでとなった。

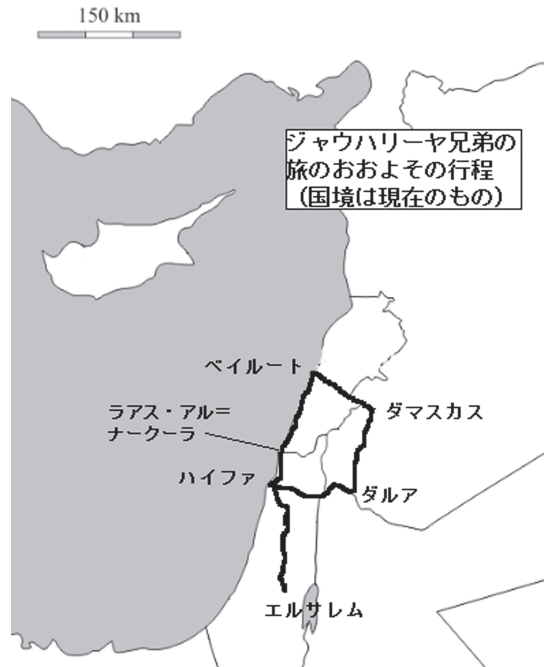
(13) 1868年のハイファの人口はわずか4,000人だったところ、1911年には23,000人となった。船舶の積載重量は、1904年の310,103トンから1913年には810,418トンとなった〔Özyüksel, 前掲書〕。ハイファの開発に関しては以下も参照。Norris, Jacob. *Land of Progress: Palestine in the Age of Colonial Development, 1905-1948*. Oxford. 2013.

(14) 仮に情勢を無視し、二回にわたる出入国手続きを経てシリア・ヨルダン・イスラエルを陸路で移動することを想定しても、11時間半での移動は困難であるし、入国できないリスクも伴うためもはや現実的ではない。

ハリヤー兄弟がレバノン・シリアに向かったこの時期は、まさにパレスチナの北部の国境線を確定させるべく、イギリスとフランスが折衝を重ねているさなかであった。さらに視点を往路に戻すなら、二人はハイファからレバノンへの境界通過地点であるラアス・アル＝ナークーラを通過してベイルートに入っている。沿岸路を車で北上するという合理的なルートは、停戦状態のイスラエルとレバノン間を直接陸路で移動することが考えられない今日の状況をここでも浮き上がらせる。

「ダマスカスを出てから何も買えず、空腹を満たすすべはなかった。ハリールが怒りだし、緊張が漂った。…へとへとになり不安を抱えてハイファの駅を降りると、我々の買った土産に通関税を払えと言われ、いらだちは高まった。ひとしきり言い合ってから95シリアリラの代金を払うと、手元に残ったのは2.5キルシュだけだった」。国境を越えることをことさら意識せずに済んだ彼らに、国境管理の証として彼らに迫った唯一の手続きが、この通関税の支払いだった。つい数年前までは同じ国であったパレスチナとレバノン・シリアはこうして別の二つの国の統治のもとに置かれ、両者間の移動にはパスポートが必要となったのだが、人々の実感としての「国境の壁」はこの段階では依然薄いものだった。

とはいえ、末端の存在ながら委任統治政府の職員であったワースィフには、あらかじめ便宜が図られたことも考えられる。すでにパレスチナでの民政開始に伴い、1920年8月には「パスポート法」が出されており、パレスチナに住むオスマン市民にパスポートが与えられるようになったが、実際には治安を理由として、パレスチナ出国には事前の許可を要したという。また、以下で確認するようにパスポートを得られない例も数多く存在した。さらに二人がこの旅行を行った1922年の夏というのは、7月24日にイギリスのパレスチナ委任統治が国際連盟によって承認され、その直後の8月10日には実質的な憲法である「パレスチナ法」が出されるというタイミングに重なる。委任統治規約の7条は、「パレスチナに恒久的に居住するユダヤ



人がパレスチナ国籍を取得することを促進する」ことをうたい、「パレスチナ法」では「ユダヤ人のナショナルホーム建設」というバルフォア宣言の文言がそのまま引用されている。委任統治政府の職員であるワースィフも、その矛盾した政策に気づき、強い調子で批判せざるをえない時期が遠からず来るのである。

## 2. ニコラ・ズィヤーダの旅 [1925] とフランスの支配

この3年後に同じくパレスチナ北部からレバノン、シリアを回った二人の人物の旅の趣は、ジャウハリヤー兄弟のそれとは大分異なるものだった。先行の二人のように車で移動して数日間の滞在を楽しむのではなく、基本的に徒歩で移動し、サイダやベイルートなどの都市を除けば宿泊は一晚にとどめて翌朝早く出発し、可能な限り多くの場所を訪問しようとしている。利用しているのは名の知られていない安宿であり、ホテルのない小さな村ではしばしば民家に泊まっている。資金や支出金額への具体的な言

及は一箇所だけで、旅の終盤、ラタキアからメルスイン経由でアンタキヤに向かう二日がかりの船旅の料金 1.80 GM が自分たちには高額のため、交渉して二人で一人分の料金にしてもらったという記述である。

旅行記<sup>(15)</sup>の筆者、ニコラ・ズィヤーダ（1907 - 2006）は、オスマン朝時代のダマスカスに生まれた。父親の死去ののち、一家でその出身地であるパレスチナのナザレに戻り、エルサレムの教員養成学校で学んでいる。1935年まで教員として勤めた後ロンドンに留学し、その後ベイルート・アメリカン大学の歴史学科に教員として採用され、シリアを中心としたアラブ・イスラーム史の研究者として膨大な著作を刊行した。

1925年の夏、当時18歳のニコラは9歳年長のダルウィーシュ・アル＝ミクダーディ（1898 - 1961）に同行するかたちで、のちに彼が「尋常ならざる」と形容するところの旅に出る。パレスチナのトゥルカレム生まれのダルウィーシュはレバノンのアメリカン大学に学び、1922年から25年までエルサレムの教員養成学校の教員をしていた。二人が出会ったのはこの学校の教師と生徒としてである。教員養成学校を1924年に卒業したニコラは、北部のタルシー

ハの学校で教えていたある日、エルサレムにいるはずのダルウィーシュに再会する。この年の4月1日、パレスチナでのシオニズム運動の成果として設立準備が進められていたヘブライ大学の開校式において、「バルフォア宣言」に名を残すアーサー・バルフォアが招かれたため、エルサレム中の学校で抗議のデモが起こっていた。教員養成学校は閉鎖され<sup>(16)</sup>、時間の空いたダルウィーシュは、一人でパレスチナ北部を巡る徒歩旅行をしていたのである。ニコラは教員養成学校教員時代のダルウィーシュがいかにアラブ・ナショナリズムに傾倒した教員であったかを描写しているが、ダルウィーシュがこの時期スカウト運動<sup>(17)</sup>に関わっていたことについては特に言及していない<sup>(18)</sup>。おそらくこの徒歩旅行も、スカウトのキャンプ旅行のスタイルが意識されていたと思われる。

### パスポート

そもそもニコラには、パスポートがなかった。本稿冒頭で引用したくだりに続き、彼は自分に公式な出生証明がなく、パレスチナのパスポートを得られなかったと述べている。所持していたオスマン帝国発行の出生証明は、1921年に帝国が消滅したことで無効となっているた

(15) ここ（註1参照）には36本のエッセーがMushāhadāt（見聞録）と題され掲載されている。このうち一部を英語に抄訳して掲載したJerusalem Quarterlyの註によれば、これらは生誕100周年記念に刊行される著作のなかに収録される予定のものであった。筆者は一部発表済みのエッセーに加筆し、重複部分を整理するかたちで執筆を進めていたと思われるが、2006年、完成を前に99歳で亡くなった。年号などは一部不完全なままとなっており、一部で文章が完結していない箇所などが残されている。本稿での引用ページはワードファイル上のページ番号である。

(16) 教員養成学校の校長で、アラブ・ナショナリスト、教育者と知られるハリール・トータフは抗議のため辞任した。トータフについてはRicks, Thomas M.. *Thrbulent Times in Palestine: The Diaries of Khalil Totah 1886-1955*. Institute for Palestine Studies&Passia. 2009.

(17) 一般に斥候（スカウト／アラビア語ではkasshāf）と呼ばれる訓練方式やこれを取り入れた組織はオスマン朝時代から存在したが、英国人口バート・ベーデン＝パウエルが組織し国際スカウト運動として発展したスカウトは、イギリスの軍政開始直後から当局主導で組織され、高等弁務官がパレスチナのチーフ・スカウトを兼ねた。次第に自立的な組織の設立要求が出され、イギリス当局やシオニストへの抵抗運動のなかでスカウトの技術や様式が活用され始め、委任統治政府の警戒を呼ぶようになった。Degani, Arnon. *They Were Prepared: The Palestinian Arab Scout Movement 1920-1948*, *British Journal of Middle Eastern Studies*. vol. 41-2. 2014. およびHarte, John. *Scouting in Mandate Palestine*, *Newsletter of the Council for British Research in Levant*. Vol. 3-1. 2008.

(18) 今のところ出典不明ではあるがアラビア語版Wikipediaの記述によれば、1925年ダルウィーシュが教員養成学校の教員を辞めたのは、ハーリド・イブン・ワリードという名のついたスカウト団の設立申請を行ったのに対し、委任統治政府が許可しなかったためとされている（ハーリド・イブン・ワリードは預言者ムハンマドの同時代人のムスリム軍指揮官であり、アラブ・イスラームのアイデンティティを示すスカウト団の設立を意図している）。またHarte [ibid.]によれば、ダルウィーシュは1926年、委任統治政府教育局長のハンフリー・パウマンへの公開書簡のかたちで、「独立したアラブのスカウト」の設立要求を行っている。

め<sup>(19)</sup>、出生地のダマスカスの知事宛に手紙で要請したものの、文書のあった建物が消失したためそれには応えられないという返事が来たという。

前述のとおりイギリスは1920年8月、軍政開始直後に「パスポート法」を作り、パレスチナ住民にパスポートを発給した。この段階ではイギリスの統治は承認されておらず、パレスチナの住民は国際法上オスマン臣民のままであり、オスマン帝国の国内法上も、1869年のオスマン国籍法に従ってオスマン国籍をもつ存在だった<sup>(20)</sup>。このように国際法上は認められない行政を続けていたイギリスが、出生を証明できないニコラにはパスポートを発給しないという恣意的な措置を取ったことになる<sup>(21)</sup>。ニコラは旅行許可証を得て出発するが、これは帰国後に返却が義務付けられた一回限りのものだった。

オスマン帝国は1920年、連合国とセーヴル条約を締結するが、ムスタファ・ケマル率いるトルコ軍がギリシャの侵攻を撃退して希土戦争に勝利する。オスマン帝国消滅後、新たに生まれたトルコ共和国が1924年7月24日にローザンヌ条約を結ぶ。ここで「トルコと切り離された領域に居住するオスマン臣民」が、その領域が移行する国家の国籍を得ることが確定され(30条)、パレスチナの住民にはパレスチナ国籍が付与されることになったのである。これ

に基づいて1925年8月1日には「パレスチナ国籍法」が成立し、ローザンヌ条約の発効日である1924年8月6日にパレスチナに居住している「トルコ臣民」には自動的にパレスチナ国籍が与えられることになった(第1条)。国外居住者には発効日から2年後である1926年8月5日までの国籍選択の意思表示が求められた<sup>(22)</sup>。ニコラとダルウィーシュがパレスチナからレバノン・シリアへと旅立った1925年夏という時期は、このように「パレスチナ国籍」というものが新たに作り出されたタイミングだったことになる<sup>(23)</sup>。

徒歩でパレスチナ北部、レバノン、シリアを回ろうと決めた二人はナザレで待ち合わせ、サファドを正式な旅の出発地点としてフーレで最初の宿泊をする。レバノン・シリア・パレスチナの国境沿いのヘルモン山の麓を歩き、翌日はヘルモン山を徒歩で越えてレバノン領内に入った。そしてレバノン南部の沿海都市サイダから北上し首都ベイルートに着き、内陸の村々を見て回ってから北部の都市トリポリに出る。それからようやくシリア領内に入るが、ラタキアから船に乗りさらに北のアンタキア(現トルコ領)へと向かう。ここで徒歩の旅を終え、車と列車を使いながらアレppo、ハマー、ホムス、ダマスカスに出ると、そこで一気に車でパレスチナに向かい、二人はナザレで別れた。

(19) 「1921年に帝国が消滅」との記述は原文に従ったが、一般的には1922年11月17日、スルタンのメフメト6世の亡命をもって帝国の消滅としている。

(20) Qafisheh, Mutaz. *The International Law Foundations of Palestinian Nationality: A Legal Examination of Palestine Nationality under the British Rule*. THÈSE présentée à l'Université de Genève pour l'obtention du grade de Docteur en relations internationales. 2007.

(21) さらに言えば、国際法上は1924年8月6日のローザンヌ条約の発効までは、パレスチナ住民はオスマン臣民であり、オスマン帝国の消滅によって、その出生証明書が無効になるのは不当である。ただしこうした措置には運用上の混乱も大きかったと思われ、一律のルールとは考えにくい。

(22) 国外居住者のなかには帰国が間に合わず、パレスチナ国籍を取得出来ずに無国籍状態になる者が出た。国籍選択の意思表示の期日として1926年8月5日が示されたのは1925年11月のことであり、実質的に9ヶ月の時間しかなかったためである。Qafisheh [ibid.] はこうした人々をパレスチナ難民の第一世代と呼んでいる。一方で帰化によってパレスチナ国籍を付与された移民は、委任統治終了までに13万2616人となり、その99%までがユダヤ人であった。

(23) 「パレスチナ国籍法」の英語の名称はPalestine Citizenship Orderである。Bankoによれば、この「国籍」は政治的な権利が付与されていない「市民権」であり、アラビア語の用法では当初区別なく「ジンスィーヤ」と呼ばれていたが、この差異に気がつき始めた人々は後者をムワーティナとして区別するようになった。Banko, Lauren. *The creation of Palestinian citizenship under an international mandate: legislation, discourses and practices, 1918-1925. Citizenship Studies*, 16:5-6, 641-655. 2012.

## フランスの支配

この旅行中、少なくとも3地点でニコラとダルウィーシュは警察から尋問を受けたり、警察の監視下に置かれたりしている。これらの出来事は偶然ではなく、フランスによる分割統治で繰り返し再編を強いられた当時のシリアの状況を映し出していることが分かる。まずはレバノンに入った二日目、日没後にサイダの町に入ったときのことである。「どこから来たのか?」と尋ねられ、「パレスチナから」と答えるが、「どこを通過して入国したのか」が問われていることにすぐに気がつく<sup>(24)</sup>。徒歩でヘルモン山を越えてレバノンに入った二人は、入国時点での当局のチェックを受けていなかった。馬に乗った3人のパトロール隊員に従って町の警察署に連れて行かれるが、最終的にサイダの遺跡局長と知り合いであることを示すと、簡単に放免される。

英国とフランスという異なる国家の主権下に入ったパレスチナとレバノンの境界通過ポイントはラアス・ナクターラであり、ジャウハリーヤ兄弟は3年前、ごく一般的なルートとしてここを通り、国境通過に関して何の印象も記していない。しかしニコラたちが通ったのは、パレスチナとシリアとレバノンの国境が引かれるヘルモン山の麓である。フランスと英国は、パレスチナの北部の国境線引き作業に2年間を費やし、「ポーレット・ニューカム合意」で国境線を画定した。ヘルモン山麓はもっとも苦心して境界を画定した場所である<sup>(25)</sup>。

こうした二つの国家権力のせめぎあいは、現実の光景の中では可視化されない。前日ベドウィンの住民のもとでもてなしを受けた彼らは、北に向かって山の中を歩いているうちに、いつしか「ヨルダン川の支流の湧き出るレバノンの領域」に入っていた。北東に向かって一日

山を登り続けていると、今度はバニヤスにいたことが分かった。つまり「我々はすでにシリアにいたことが分かった」<sup>(26)</sup>。このほぼ一年後の英仏間の交渉の結果は、バニヤスの村と水源を最終的にシリア側に含めるものであったが、水流はパレスチナ側に流れ込む位置に設定され、境界の再設定の可能性も残すという微妙な内容であった<sup>(27)</sup>。山の中を移動しているうちに二人は確定されつつあった国境を自然とまたぐことになるが、彼らはこの一帯がそうした場所であることを意識しつつも平然と歩くのである。

その夜、二人はヘルモン山のふもとのシリア側にあるジャッバター・アル＝ハシャブの長老の家に泊まる。そこで彼らが耳にしたのは、ドゥルーズ山地で、スルタン・アル＝アトラシュ<sup>(28)</sup>がフランスに対する反乱を率いており、それに対してフランス当局がその地の家を破壊し、穀物に放火するといった弾圧を行っているというニュースであった。のちにこの反乱は1925年から1927年まで持続的に続いた「シリア大反乱」として歴史に名を残すことになるが、フランスが徹底的に弾圧を加えるなか都市部の大商人などが合流せず、全シリア蜂起には至らなかったことで挫折する。読者は現在、この時期のフランスによる分断統治下で作られられた枠組みが、きわめて暴力的なかたちで再編されようとしているのが、2011年以降のシリアで起こっている事態であることに思い至るだろう。

警察との2度目の関わりは、シリアのラタキアでのことであった。ラタキアに夜中に到着しホテルに泊まった翌朝6時、起こされて警察署に連行され、許可されていない道を通って国に入ったと言われるのだ。フランスはこの地域を、アラウィー教徒をマジョリティとする「アラウィー国」として「シリア」から切り離して

(24) Ziyādah, p.6.

(25) 英仏間の国境線画定のプロセスについては、Biger, Gideon. *The Boundaries of Modern Palestine, 1840-1947*. RoutledgeCurzon. 2004.

(26) Ziyādah, p.36.

(27) Biger, p.147.

(28) スルタン・アル＝アトラシュ(1891-1892)はドゥルーズ派出身のリーダーで、アラブ民族主義者としてファイサル・イブン・フセイン率いるアラブ反乱に参加、フランス委任統治下で大シリア反乱を率いた。



いた。ニコラの記述によれば、フランス当局はパレスチナから来た人間を警戒しており、長身のダルウィーシュは、実はシリアで反仏活動を行う英国人ではないかと疑われた。サイダの時とは違い、地元の人間と知り合いであることは監視の目を逃れる役に立たず、その人物が反仏運動のリーダーであるということがかえって警戒を招くことになった。ラタキアにいるあいだは、常に警察の誰かが離れたところで彼らを見張っており、山にハイキングに出かけても、彼らの監視役がひょっこり登場するという具合である。宿泊した家の家族が実は当局に協力していることが分かるなど、このあたりの記述は独立後のバアス党政権下でのシリア社会の監視体制とよく似ている。

皮肉を込めて「ホストの保護を受けた特別なラタキア訪問」と呼ぶ経験のあと、二人はむしろ、フランス当局の支配の現実を目の当たりにする場所をあえて訪問することにしたようである。特別行政地域とされ、この年に「シリア国」に編入されたばかりのイスケンデルンに向かうのだ<sup>(29)</sup>。一帯をギャングや盗賊が支配しているため徒歩での旅は危険だとの情報を得て、いったんトルコ領内のメルスインを經由する地中海周航船に乗る。ビザがないためメルスインで下船することはかなわず甲板で一日過ごし、イスケンデルンに入港するとフランス人の将校による取調べを受ける。丁寧な物腰ながら旅の目的を聞かれ、アンタキヤに入るために許可申請が求められる。道が安全ではないためアンタキヤまで警察の車で行くよう親切なそぶりで誘われるが、むしろ監視目的であり、アンタキヤで警察署に寄ることも義務づけられる。

ニコラはレバノンのトリポリを訪問したさい、かつてこの地がアッカやナブルス（ともにパレスチナ北部の都市）とともに、ベイルート州の一部であったことを再び確認している。「われわれはこの国のフランスの統治の開



始時点、その分割途上にいた。すでにパレスチナはイギリス委任統治下にあった」<sup>(30)</sup>。彼らは自分たちの足で歩くという旅のスタイルを選択した結果、はからずも当局の嫌疑の対象となり監視下に置かれた。それ自体は不本意な経験であったにせよ、その経験を通じてかつて一体であった郷土の分割の実態を、知識としてではなく身体で学ぶという稀有な機会を得たのである。

### 3. 〈もてなし〉<sup>ディアーフ</sup>と〈郷土〉<sup>ビラード</sup>

#### この国とわれわれの国

兄を連れて旅に出たワースィフ・ジャウハリヤは、レバノンで若い女性たちが水煙草を楽しむ様子に注目することで〈この国〉と〈われわれの国〉の違いに気づく。「私は内心、こ

(29) この地域はトルコ人とアラブ人が混住する地域だが、第一次大戦後のセーヴル条約でフランス委任統治領シリアに割譲された。オスマン帝国消滅後、トルコ共和国政府がトルコへの回復を主張し、トルコ・シリア間の係争地となる。最終的にハタイ県としてトルコに編入された。

(30) Ziyādah, p.47.

の国の女たちと比べ、我々の女たちは可哀想だと思った。彼女たちには生者と死者のあいだほどの違いがある」<sup>(31)</sup>。

上述のように二人は旅の終わりに資金を使い果たしてしまっただが、ハイファまでは何とか鉄道でたどり着く。依然苛立ちを見せる兄に対し、ワースィフはここで「もう僕らの国に着いたんだ、ハイファならエルサレムの友だちや知り合いがたくさんいるよ」との言葉によって宥めようとする<sup>(32)</sup>。「僕らの国」ならば、友人を見つけて誰かにお金を借りることが出来るというわけだ。これは〈われわれ〉と〈彼ら〉の違いを意識した言葉ではあるが、裏を返せば友人さえ作る事が出来れば、かの国も自分の郷土のようになるという野心的な心性、飽くなき交流への意欲にも通じる。

高級ホテルに滞在し、旺盛に土産物を買って込んだワースィフだが、観光と消費活動以上に彼を楽しませたのは、地元の人々との交流や彼らから受けたもてなしである。レストランやカフェでは近くの席の家族連れと親しくなり、いつしか同席し、さらに別のグループと食事を囲む。ただしこうした光景は、アラブ世界ではそれほど珍しいことではなく、ワースィフもそれ以上具体的な描写はしていない。その彼がとりわけ喜びとノスタルジーを込めて描くのは、1930年代初頭の、レバノンへの2度目の旅行で受けたもてなしだ。アマチュアの演奏家である彼は、クンバズと呼ばれるトルコの楽器を抱え、再びハイファ経由でベイルートに入ると、今度はレバノン山中のドゥフル・アル＝シェウエイルに向かう。なぜこの地を目指したのかの説明はないが、避暑のために夏をレバノン山中で過ごすことは、パレスチナの上流社会ではよくあることだった。すでにハイファでの滞在を楽しんだ彼はレバノンに行くのをやめようとさえ考えた、とあるので必ずしも計画的な旅ではなかったようだが、着いてみるとエルサレムの大勢の知人や友人が同じホテルにいた。

アマチュアの演奏家であるワースィフは、トルコからもたらされた弦楽器クンバズをこの旅に持参していたが、これを演奏することで思いがけない「センセーション」を巻き起こす。連日同じホテルで夜中まで演奏し、歌い、居合わせた人々とともに至福の時を過ごす。喜んだホテルの主人は、自分の息子が洗礼を受けるさいに証人となる代父になることを彼に依頼する。さらに彼は、ホテルが企画した野外劇でも出演メンバーの一人となるという名誉にあずかる。こうしたことは「とりわけパレスチナから来ている友人たちを歓喜させ」、彼自身も有頂天になって楽しんでいるようすが伝わる。

9日間の夢のような時間が過ぎると、ホテルの主人は宿泊料の受け取りを拒否し、ワースィフのほうもそんなわけにはいかないと言い張る、というお決まりの状況が生まれる。結局彼は、「飲食込みで三日間のアラブのもてなしを受けることにした」。アラブの習慣として、3日間は何も言わずに旅人をもてなす義務があると言われるとおり、3泊分は無料のもてなしを受けたかたちにしたということである。こうして「いまやわれわれにはレバノン山に家族が出来たということだ。いまま親交を続け、手紙を書き、贈り物を交わしている」。帰路につき、エルサレムに車が入ったとき、車が突然止まる。「ドライバーがタイヤの修理をするまでそこで待ちながら我々は言った、車でさえパレスチナに戻るのを必死で嫌がっているんだ」<sup>(33)</sup>。次第に不穏になるパレスチナ情勢のことを暗に指しているとも考えられるが、ここではそれ以上に、レバノン山で過ごした日々がすでに〈わが郷土〉となったということではないだろうか。ワースィフの回想記を読みながら浮かび上がるのは、郷土を領域的な実体としてではなく、もてなされもてなしながら人々と交流し、人生を味わい尽くす時間や場と捉える可能性である。

アラブの〈もてなし〉<sup>ディヤーフ</sup>をめぐる言説は、とり

(31) Jawhariya, p.357.

(32) Jawhariya, p.358.

(33) この箇所の引用はすべて、Jawhariya, p.488.

わけ〈ベドウィンのもてなし〉として、常に受け手によって語られる。不意の客に過剰な歓待を行い、3日間は相手の名前を尋ねることもなく無条件に受け入れる砂漠の掟、といった言説は、オリエンタリズムの一部を構成しているだろう。都市に住む知識階級のアラブ人がベドウィンの集落や、ホテルもない農村の家庭で受けたもてなしの様子や受け手の思いは、その部分の記述だけを切り取って読めば西欧の旅行者が描くステロタイプのな〈もてなし〉と重なって見えることもある。それは郷土とともに生きようとする生の全体の中で判断されるべき問題であるが、その姿勢は次のニコラの記述のように、テキストを通して読み取ることも可能である。

#### 権利としてのホスピタリティ

徒歩旅行を行ったニコラとダルウィーシュは、その「ショートパンツに埃まみれのシャツ、乱れた頭髪」といういでたちのため、もてなしに関してもしばしば本意な状況に遭遇する。

二人はレバノンの列車の中で出会った男性から、「ムナイタラ」の名望家を訪問すれば親切なもてなしを受けられると勧められる。そこでその手前での食料調達をしないまま、ちょうど正午にその家の扉を叩くが、その主人から受けたのは「気乗りのしない対応」だった。「思うにこの人物は、人にきわめて上品な服装を求める人物なのだ」<sup>(34)</sup>。我々の旅とその目的について20分も話したかと思われたところで水を頼むと、レモネードが出される。普通ならば「飲み物や食べ物は持っているのか」「お腹が空いていないか」などと聞かれるタイミングであろう。10分後、最後の機会としていとまを告げると、「われわれがアーケラに行こうとしていることを知っているにもかかわらず、彼は食事について一言も言わないまま出立を了とした」。「ムナイタラ」の正確な位置は不明だが、アフカ近郊であることを踏まえれば、アーケラまでは10キロ以上の登山路である。

ここには地元の住人が旅人に水や食料などを

与えてもてなすことを当然とする社会のなかで、その暗黙の期待が珍しく裏切られた場合の当惑と失意が率直に述べられている。客として名誉あるもてなしを受ける資格がないことは了解しつつ、これから長い登山路を含む長い行程の前に必要な飲食を提供されることを期待し、彼らの意図を了解しているはずの相手がそれを無視すれば、それは「苦情」の対象となる。「もしも台所でも食事をさせてもらえたならば、苦情など言わない。我々の格好では台所より以上は許されなかつただろうから」。

旅の途上での二人が異質な存在であることは、何よりも徒歩で旅をしているということ自体に起因する。裏返せば同じ社会のなかで異端的な振る舞いをしていてだけで、完全な他者ではない。旅の序盤、二人はレバノンに向かってヘルモン山を越えるために荷物を載せる騾馬を連れた地元のガイドを雇っているが、そのガイドによれば、これまで自分が案内してきた人々はすべて外国人であり、アラブ人は初めてのことだった。彼らは地元の人々と同じアラブ人で、自分たちの社会のルールに則ってもてなし側への期待や要求を行っており、立場が変われば自分たちも同じようにもてなす側に立つという自覚はあつたはずである。だからこそ、彼らの期待を外す相手を正面から批判するのだ。彼らは行く先々で、「なぜ徒歩旅行をしているのか」を問われ、「郷土<sup>アル=ピラード</sup>について直接知るためです」と答えることになる。「あなたがたのピラード」でも「われわれのピラード」でもない、すでに統治のされ方こそ分かれてはいるが、限定詞付きの一つの「ピラード」である。

彼らの遇され方は、状況や相手によって大きく変わる。空腹を抱え、途中で木に実るアーモンドの実を手にとろうとする虚しい試みまでした挙句、二人はこの日の夕方アーケラに着く。同じ目に遭うのではないかと不安を抱えながら一人の老女にホテルの有無を尋ねると、「ここにはホテルはありません。ですが、夕方に来られた人は、村のお客です。うちにいらっしやい」という確固とした返事を受ける。着いてみると

(34) Ziyādah, p.14.

家の主人は外に出ていたが、老女は動じることもなく「あなた方はお客さんですよ。ようこそ」と声をかけ、さっそく水とコーヒーを出してくる。家の主人が戻ってくると、彼は挨拶もそこそこに食事の支度のために退席する。「我々は客であり、家のありあわせでは不十分というわけだ」<sup>(35)</sup>。ニコラは出された食事の内容まで記し、「昼間の空腹を埋め合わせてくれる宴だった」と書く。食事のあとには夜の会話が続く。家の主人だけでなく、近所の人々なども自然に集まった様子だ。「(彼らは)パレスチナについて、民族運動について、イギリス政府について、それからわれわれの仕事について尋ねてきた。われわれの旅のやり方には驚いていた」。説明的に明示されていなくとも、期待通りの「アラブのもてなし」を受けることでニコラたちと地元の人々が共通の社会のメンバーであることが確信され、この社会のメンバーとしての自己の存在が確認されていることがここでははっきりと伝わる。

## おわりに

第一次大戦後、オスマン帝国の支配を離れたパレスチナの住民は、すでに大戦中から議論の対象となっていた自社会の将来のあり方について、さまざまな提案や要求を挙げてゆく。しかし、やがてイギリスによる委任統治が実体化するなかで、運動の中心は規定路線となっていた統治のあり方に抵抗するというかたちをとることを強いられる。そのプロセスを通じ、彼らは次第にパレスチナをイギリスの統治する領域として捉えることに慣らされてゆく。全体の流れとしてはそうであったとしても、この時期の人々の活動の中にはさまざまな可能性が存在した。日記や回想録は、そうした可能性を掘り起こすための貴重な資源であろう。

ラシード・ハーリディは *Palestinian Identity* のなかで、パレスチナ人のアイデンティティは

一般に言われるようにナクバによる離散経験を経て60年代に形成されたのではなく、オスマン朝末期から英国委任統治確立の時期におけるシオニストへの農民の抵抗や、この時期に活発化したパレスチナ人の言論活動のなかに求められることや、パレスチナ人としての自己の形成を促した〈他者〉はシオニストだけではなく多様な相手であったことを指摘した<sup>(36)</sup>。ハーリディのこの時期への注目と「多様な他者」という視点への共感を踏まえつつ、筆者の関心に沿ってこの指摘を言い換えると、パレスチナ人のアイデンティティの形成は、〈抵抗〉のモメントだけによるのではなく、この時代のパレスチナにおいて、人々が執拗に交流の場を追求し、もてなされもてなす関係を生きることそのものなかにあった。あたかも境界がないかのように移動と交流を行い、人生を楽しもうとする今日のパレスチナ社会の人々がもつ矜持は、イギリスとフランスという国家によって推し進められたヨーロッパ植民地運動によって、多文化的であることが前提であった郷土が次第に宗教・宗派・民族によってマーキングされ境域化される環境のなかでこそ生まれ、試されながら鍛えられたのである。

(35) Ziyādah, p.15.

(36) Khalidi, Rashid. *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness*. Columbia University Press. 1997.